

小児科、NICU、産婦人科での臨床経験と
青年海外協力隊、国境なき医師団の活動を経て
フランス語圏アフリカでのエキスパートを目指す保健師

きくち ひろこ 菊地 絃子

国際医療協力局
連携協力部 展開支援課
保健師



★略 歴

- 2005 国立国際医療センター入職（現・国立国際医療研究センター）小児科病棟
- 2009 フランス語学留学（ワーキングホリデービザ）
- 2010 日本赤十字社医療センター入職 未熟児室
- 2011 青年海外協力隊 ベナン共和国 派遣
- 2014 国境なき医師団 中央アフリカ共和国（2回）、ハイチ共和国 派遣
- 2016 国際医療協力局 入局
- 2017 宮崎市福祉部子ども未来局親子保健課育児支援係 出向
- 2018 国際医療協力局 課題別研修「アフリカ仏語圏地域 妊産婦の健康改善」担当
仏語圏アフリカネットワーク、国際母子手帳会議、国際母子カンファレンス等
- 2019 JICA国際緊急援助隊 感染症対策チーム 派遣
JICA技術協力 セネガル母子保健サービス改善プロジェクト フェーズ3 派遣

★現在の主な担当業務

セネガル母子保健サービス改善プロジェクト フェーズ3
保健医療行政/看護助産教育 JICA専門家

—————菊地さんが、看護職を目指したきっかけは何ですか？

祖母や両親の入院のお見舞いに行き、幼い頃から「白衣の天使」に憧れていました。また、世界の貧困や紛争、食糧危機、医療の行き届かない国や地域があることをテレビなどで観て、漠然ですが何とかできないものかと考えるようになりました。小学校の終わりには「アフリカで看護職として働くこと」が夢となっていました。

中学・高校では青少年赤十字委員会に入って、奉仕活動に努めていました。高校生の頃、青年海外協力隊や国境なき医師団を知り、憧れを抱いていました。高校卒業後、国立仙台病院附属仙台看護助産学校へ進学しました。戴帽式でナースキャップをいただいた時の感動は、今も忘れられません。

その後、国際協力の道を目指すために宮城大学へ編入し、地域保健や公衆衛生学を学びました。大学在学中は、図書館で国際協力に関する本や資料を読み漁り、サブサハラアフリカに母子保健指標の低い国が多いことを知りました。そこでフランス語を独学で勉強し、青年招へい事業でフランス語圏アフリカの保健医療人材とワークショップを行うプログラムに参加しました。フランス語を公用語とするアフリカのさまざまな国の人々が、熱心に母子保健に関するディスカッションを繰り広げる姿に魅せられ、「フランス語圏アフリカ」の「母子保健分野」で働きたいと強く思うようになりました。

大学卒業後の2005年、お世話になった国立系列の中でも国際保健医療協力に取り組む国立国際医療センター（現NCGM）に入職して小児科病棟を希望しました。

————センター病院での仕事を教えてください。

国立国際医療センター病院では看護師として小児科病棟に勤務し、小児科・NICU（新生児集中治療室）・婦人科の急性期・慢性期・周手術期・ターミナル期の看護にあたりました。「献身的な看護」をモットーに、ベッドサイドに寄り添い、小さな変化に気がつき対応できるような看護師を目指しました。また、家族やスタッフと協調性をはぐくむことを大切に、日々研鑽を重ねました。後輩の指導係も担当し、「褒めて伸ばす」指導に取り組みました。

国際医療協力局には小児科時代にお世話になった上司や先輩方がいますので、当時から憧れていました。まずは青年海外協力隊に参加したかったので、必要な臨床経験を重ねて、4年目に青年海外協力隊を受験しましたが、不合格！挫折の極みを感じました。正直、もう結婚して落ち着こうかと思いましたが、当時付き合っていた彼は私の背中を押してくれました。何か強みを身につけようと思い、細々と続けていたフランス語を磨くため2009年に渡仏しました。

————フランスでの生活は、菊地さんにとってどんなものでしたか？

フランス生活で人生がバラ色になりました。パリ第四大学附属フランス文明講座（ソルボンヌ）に通いました。フランス語の習得は厳しく、毎週金曜日の試験前は泣きながら勉強していましたが、非常に丁寧に論理的にそして容赦なく厳しいソルボンヌの教えは、私のフランス語の基礎になっています。フランスの食文化、歴史、自然、多民族国家、自由平等博愛の精神、自己主張、住んでいたアフリカンな移民地区など、全てが愛おしい生活でした。フランス語を習得し、日本に帰国後すぐ、国際医療協力局の開催する国際保健医療協力研修を受講しました。研修では国際協力を基礎から学び、ベトナムでさまざまなレベルの医療施設を視察し、ディスカッションを行いました。中でも一番住民に近いコミュニティで働きたいと思い、NCGM渡航者外来の非常勤看護師を受験しましたが、またもや不合格！再びの挫折でめげそうになりましたが、NICUの臨床経験を重ねようと思いを決意。

2010年、国内トップクラスの周産期医療をもつ日本赤十字社医療センターを受験し入職、未熟児室に配属となりました。

NICU看護のスキルを磨きながら、翌2011年、青年海外協力隊に再チャレンジ、今度は一回で合格しました。得意のフランス語と、自分の主張を伝えることができたことが良かったのかもしれませんが、もっとNICUの仕事の続けたかったのですが、職場の理解もあって、夢だったアフリカへ踏み出すことにしました。



パリ第四大学附属フランス文明講座
ディプロム授与式。担当教官アン先生と一緒に

————青年海外協力隊の後、三度目の挫折を経験して国境なき医師団に参加したと聞きました。

青年海外協力隊で念願だったフランス語圏のサブサハラアフリカ（ベナン）に行きました。憧れだった母子保健分野、草の根レベルで活動しました。住民に一番近いコミュニティの保健センターにて、産科と予防接種部門で2年間活動しました。現地での信頼関係を築き、医療の質の改善に努める取り組みを行い、やりがいと手ごたえを感じました。これからも愛するアフリカで活動したいという思いに燃えていました。

帰国後、JICAの健康管理員の試験を受けますが、不合格！三度目の挫折でどん底を味わいました。傷心のままフランスへ出かけ、フランスの友人と会い、国境なき医師団を勧められました。

そういえば高校時代に憧れていたこと思い出し、さらに医療の行き届かない国や地域の最前線へ向かうことへの情熱が沸き起こり、応募しました。まだまだ時期尚早かとも思いましたが、運よく登録することが叶いました。「グリーンライト！」（青信号、合格！）と言われた、あの時の嬉しさはいまだに忘れられません。

派遣までの数カ月の間は、産科クリニックでの手術室看護師、離島応援ナースなど、臨床のスキルアップに務めました。



ベナンのアラダ地域保健センター産科で
ベナンは双子が多い！

国境なき医師団は、政治的・宗教的な介入を受けず、独立・中立・公平を保った組織で、無償で医療提供を行います。国境なき医師団のポリシーに感銘して、その一員として活動することにやりがいと生きがいを感じていました。人の命には敵も味方も関係なく、ただ「目の前の命を救いたい」という献身的な医療と看護を捧げる、情熱的な仕事でした。さまざまな国の人々がインターナショナルスタッフとしてチームを組みます。2014年から中央アフリカ（2回）、ハイチで活動しました。スタッフの士気はとても高く、文化や習慣・宗教の違う人々が集まる場で働くことは、自由であり率直であり、フランス生活に似た過ごしやすさを感じました。



国境なき医師団。
中央アフリカ共和国の活動地にて

——— 国境なき医師団から国際医療協力局に入職したのは、なぜですか。

国境なき医師団で仕事をずっと続けたかったのですが、国境なき医師団がその国や地域に永久に居続けることはできません。いつかは必ず、その土地の人々だけで生きていかなければなりません。そう考えたときに、さまざまな事業でその国の保健省を支援する国際医療協力局の仕事は、長い目で見て重要な役割を担っているのではないかと思いました。

小児科病棟勤務でお世話になったNCGM、長年憧れていた国際医療協力局。より多くの母子の命を救い、母子が未来永劫幸せであるために貢献できる仕事に情熱を燃やそうと思いました。ダメ元で、それまでの派遣先だったハイチから帰国、国際医療協力局の入職試験を受け合格することができました。2016年10月、ようやく国際医療協力局に入職しました。

2017年4月から一年間は、宮崎県宮崎市に出向し、保健師として国内の母子保健行政を経験しました。国内の課題は、アフリカや途上国の課題とは異なりますが、母子の命を救うという最終目的は同じです。そのための仕事は大変やりがいがあり、温かく団結力のある出向先の上司や先輩方に支えられ、短い間でしたが、私の素晴らしい財産となりました。宮崎での経験を生かして、広い視野を持ち、住民に寄り添う保健師の心で、国際保健医療協力に務めていく決意を新たに出向を終えました。



健やか親子21全国大会で、
宮崎市の母子保健の取り組みを紹介

2018年4月に、国際医療協力局に戻り、課題別研修「アフリカ仏語圏地域 妊産婦の健康改善」の主担当を務めさせていただきました。宮崎での母子保健行政経験を生かし、研修員の皆様へ還元するこの業務はまさに今までの集大成の取り組みでした。日本の地方行政がわかるからこそ、視察先での状況について追加説明もできましたし、また仏語圏アフリカの母子保健の現場経験があるからこそ、実際に現場でどのような障壁や問題があり得るのかをアフリカ目線で考えることができました。

また、ギニア・コナクリで行われた仏語圏アフリカネットワーク会合、タイ・バンコクで行われた国際母子手帳会議にも参加させていただきました。



課題別研修
「アフリカ仏語圏地域 妊産婦の健康改善」の様子



国際緊急援助隊 (JDR) の様子

2019年6月には、国際緊急援助隊 (JDR) 感染症対策チームの導入研修に参加し、その後まもなく8月に召集がありました。コンゴ民主共和国東部エボラ制圧ミッションです。感染症対策チームの隊員として、看護職が選ばれたのは初めてのことです。緊張もありましたが、愛する仏語圏アフリカの1つであり、兼ねてから憧れていたコンゴ民主共和国です。フランス語が流暢に話せること、仏語圏アフリカのコンテキストに親和性が高いということなどから、選んでいただいた使命を果たすべく、活動してきました。

————— 菊地さんの夢、これからの展望を教えてください。

現在、ライフコースヘルsteamに所属し、JICA専門家としてフランス語圏アフリカのセネガルに赴任しております。セネガル全土で「妊産婦・新生児が尊重されたケア」を実践していくために、セネガル保健社会活動省の母子保健局母新生児課を支援しています。2年間の任期で、COVID-19の影響で遠隔業務していた時期も長かったのですが、現在はセネガルに戻って勤務しています。

今後も、フランス語圏アフリカを中心に、保健医療体制が脆弱な国や地域、紛争国、政情不安定な国や地域において、安心して医療を受けられるような体制づくりに貢献したいと思います。国際医療協力局に所属しながら、必要な時は国境なき医師団に参加することが私の夢です。

————— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

始めるのに遅すぎることはありません。モチベーションがある時に動き出しましょう！私はNCGMで看護師人生をスタートし、紆余曲折を経験しました。国際医療協力の世界に一步を踏み出したのは30歳になってからです。

一方で、年齢制限があるJPO外務省ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー制度やJICAジュニア専門家などもあります。女性としては、出産可能年齢もあります。それらを併せて、キャリアライフバランスを考えるには、「逆算」が必要だと思います。ただ計画しても思い通りにいかないことはたくさんありますので、プランA、プランBといろいろなプランを考えてみてください。全ての挫折はチャンスに変わると私は思います。ピンチでもめげずにチャンスに変えて、世界へ羽ばたきましょう。



～出会いと別れの国際医療協力～

看護学校時代、青年海外協力隊を終えた先輩が講演会に来てくれました。イスラームのベールを纏い、民族衣装に身を包んだ先輩。生き生きと話す任地での活動や生活の様子にすっかり魅了され、終了後も講師室に突撃してたくさんの質問をしました。先輩は笑顔で答えてくれて、進路についてもアドバイスしてくれました。私が大学編入を目指したのは先輩との出会いがきっかけです。その後、憧れの先輩とはお会いする機会もなく御礼や近況報告もできませんでしたが、なんと20年後に国際医療協力局で再会を果たしました！あのときの感動を忘れられません。

また、パリのシャルル・ド・ゴール空港は私にとって重要な場所です。国際医療協力局の尊敬する方々と、偶然にお会いしたことが何度もあります。なんと幸運なことでしょう。その一瞬の出会いが、私のその後の人生を導いてくれました。

そして現在セネガルでは、青年海外協力隊時代の先輩でJICA課題別研修でもお世話になった助産師さんと一緒に働いています。なんと幸せなめぐり合わせでしょう。国際協力の世界は狭いと言われますが、このような感動の出会いに満ち溢れています。

一方で、悲しい別れも経験しました。青年海外協力隊時代に1番の協力者として一緒に活動を盛り立てくれた保健センターの助産師長。任期終了後も連絡を取り合い、私が国境なき医師団で中央アフリカに赴任した際は心から喜んでくれました。「中央アフリカにいるの？すごいじゃない！キャリアアップして素晴らしいね。ところで結婚と出産は？早くしなさいよ。」そう言ってくれた彼女は、のちに第三子を妊娠出産しますが、産後の肥立ちが悪く帰らぬ人となってしまいました。ベナンでお世話になった恩師が教えてくれ、彼女の葬儀にも立ち会ってくれました。多くのお産に立ち会って、たくさんの女性と子どもを救ってきた彼女が…ショックで胸が張り裂けそうでした。

また、国境なき医師団時代の1番の相棒、プロジェクトの“静かなる力”と言われた薬局責任者、いつも冷静かつ敏腕に私をサポートしてくれた彼も、帰らぬ人となりました。任期終了後も連絡を取り合っていました。他の同僚から原因不明で天国へ旅立ったと知らされました。

出会いは人生の宝物です。国際医療協力の世界では、国境を越えて、人種を超えて、たくさんの出会いと別れに遭遇します。大切な人を失う前に、また自分が病気や事故で先立つ前に、日々感謝の気持ちを伝えて、1日1日を精一杯、後悔のないように生きたいものです。

(2021年5月)

ありがとうございます。